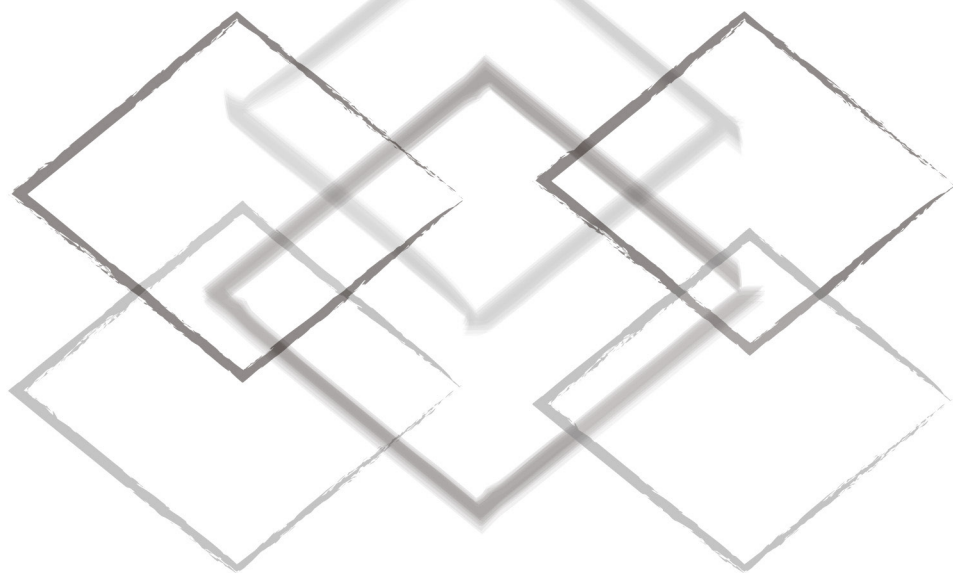


芥川

竜之介

# 羅生門



一冊堂青空文庫



## 羅生門

芥川龍之介

ある日の暮方の事である。一人の下人<sup>げにん</sup>が、羅生門<sup>らしようもん</sup>の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗<sup>にぬり</sup>の剥<sup>は</sup>げた、大きな円柱<sup>まるばしら</sup>に、蟋蟀<sup>きりぎりす</sup>が一匹とまっている。羅生門<sup>らしようもん</sup>が、朱雀大路<sup>すざくおおじ</sup>にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠<sup>いちめがさ</sup>や揉烏帽子<sup>もみえぼし</sup>が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風<sup>つじかぜ</sup>とか火事とか饑饉<sup>うごい</sup>とか云う災<sup>わざ</sup>がつづいて起った。そこで洛中<sup>らくちゅう</sup>のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎<sup>うちくだ</sup>いて、その丹<sup>に</sup>がついたり、金銀の箔<sup>はく</sup>がついたりした木を、路<sup>みち</sup>ばたにつみ重ねて、薪<sup>たぎぎ</sup>の料<sup>しろう</sup>に売っていたと云う事である。洛中<sup>らくちゅう</sup>がその始末であるから、羅生門<sup>らしようもん</sup>の修理などは、元より誰も捨てて顧<sup>かみ</sup>る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸<sup>こり</sup>が棲<sup>す</sup>む。盗人<sup>ぬすびと</sup>が棲<sup>す</sup>む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄<sup>すて</sup>てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも

気味を悪るがつて、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代りまた鴉からすがどこからか、たくさん集つて来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾しびのまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻ごまをまいたようにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄つばみに来るのである。——もつとも今日は、刻限こくげんが遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞ふんが、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖あおの尻おしりを据えて、右の頬に出来た、大きな面皰めんぽを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと言う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微すいびしていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待つていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてい

た」と云う方が、適當である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の S e n t i m e n t a l i s m e に影響した。申の刻さる下りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日あすの暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した藁いらかの先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいるしるし違はない。選んでは、築土つじの下か、道ばたの土の上で、饑死うえじをするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊ていかいした揚句あげくに、やっとこの局所へ逢着ほうちやくした。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後

来る可き「盗人ぬすびとになるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇氣が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏くしゃみをして、それから、大儀たいぎそうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶ひおけが欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗にぬりの柱にとまっていた蟋蟀きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸くびをちぢめながら、山吹やまぶきの汗衫かざみに重ねた、紺あおの襖あおの肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患うれえのない、人目にかかる惧おそれのない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思つたからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子はしごが眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄ひじりづかの太刀たちが鞘走さやばしらないように氣をつけながら、藁草履わらぞうりをはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子ようすを窺うかがつていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚うみの中に、赤く膿うみを持つた面頬にきびのある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高

を括<sup>く</sup>っていた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこそこ動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛<sup>くも</sup>の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮<sup>やもり</sup>のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平<sup>たい</sup>にしながら、頸<sup>のぞ</sup>を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸<sup>しがい</sup>が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏<sup>こ</sup>ねて造った人形のように、口を開<sup>あ</sup>いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくろがつていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾<sup>おし</sup>の如く黙っていた。

下人<sup>げにん</sup>は、それらの死骸<sup>ふらん</sup>の腐爛した臭氣に思わず、鼻を掩<sup>おお</sup>った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪つてしまつたからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲<sup>うずくま</sup>っている人間を見た。檜皮色<sup>ひわだいろ</sup>の着物を着た、背の低い、痩<sup>や</sup>せた、白髪頭<sup>しらがたま</sup>の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片<sup>きざれ</sup>を持つて、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時<sup>ざんじ</sup>は呼吸<sup>いき</sup>をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身<sup>とうしん</sup>の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱<sup>しつみ</sup>をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従つて抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行つた。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云つては、語弊<sup>ごへい</sup>があるかも知れない。むしろ、あ



らゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、餓死うえじにをするか盗人ぬすびとになるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片きざれのように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいかわからなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さつきまで自分が、盗人になる気でいた事なぞは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄ひじりづかの太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩いしゆみにでも弾はじかれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出そうになるほど、見開いて、唾のように執拗く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。

「己は検非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。」

だからお前に縄なわをかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守った。暈まひだたの赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになつた唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖つた喉仏のどぼとけの動いているのが見える。その時、その喉から、鴉からすの啼くような声が、喘あえぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わつて来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢かすらにしようと思つたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑ぶべつと一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色けしきが、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持つたなり、墓むきのつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

「成程な、死人しびとの髪しの毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸しすんばかりずつに切つて干したのを、干魚ほしうおだと云う

て、太刀帯たてわきの陣へ売りに往いんだわ。疫病えやみにかかって死ななんたら、今でも売りに往いんだいた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯たてわきもが、欠かさず菜料さいりょうに買っていたそうなの。わしは、この女のした事が悪いとは思おもうていぬ。せねば、餓死をするのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思おもわぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであらう。」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を鞘さやにおさめて、その太刀の柄つかを左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面皰にきびを気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇氣が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさつきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、

考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面炮（おわ）から離して、老婆の襟上（あざけ）をつかみながら、噛みつくようにこう云った。

「では、己（おれ）が引剥（ひぎ）をしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色（ひわだいろ）の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪（しろが）を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜がある（こくどうどうしやう）

ばかりである。

下人の行方<sup>ゆくえ</sup>は、誰も知らない。

(大正四年九月)

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---